

子どもの死のイメージ

——イメージ描画を用いて——

爲計田 歩 美

問題・目的

1. 社会の中の死

2000年代に入り、脳死や臓器移植に関する死の定義の問題、延命治療や尊厳死、などが取り沙汰され、以前に比べ、死に関する問題が社会の中で取り上げられる機会が増えてきている。しかし、われわれは「死」は忌むべきものであるという文化的な背景により、日常の中で話題にすることを避ける傾向がある。

昔は、お年寄りや自宅に家族に見守られながら亡くなることが多く、人々にとって「死」は忌むべきものであると同時に、現実の中に存在する身近なものでもあったと考える。現在では、多くの死は病院の中で見られるものであり、身近にある「死」はゲームやテレビの中のもので、そのため日常生活とはかけ離れた空間の中に存在するものであることが考えられる。この状況を上野(1995)は、「今日、死はわれわれの身近にあるようで身近にないといった奇妙な状況におかれているのだともいえよう」と表している。

子どもへの死の教育や、予後不良の病児に対して、インフォームド・アセント(小児患者の治療に際して、医師が当事者である子どもに対しても治療に関する説明と同意を得ること)の重要性が言われる中で、子どもに対してどのようにまわりの大人が関わっていくかということとはとても重要なことではないかと考える。また、上記の特別な状況だけでなく、子どもの死生観の発達には死別体験が影響しているとの報告もあり、その時の周囲の大人の関わりは重要ではないだろうか。このような問題を考えるうえで、子どもの死のイメージを知ることは必要なことではないかと考える。

2. 死についての研究の動向

1970年代に入って「死」について学問として取り上げられるようになり、デーケン(2001)は、「生と死が表裏一体である以上、これを死に関わりのあるテーマ

から、学際的に探究するのが死生学である」とし、新しい学問分野として扱われている。川島(2009)は、死の心理学的研究の中心的なテーマとして、死への態度、死にゆく過程、死別による悲嘆、ターミナル・ケアや死への準備教育の4つを挙げている。「ターミナル・ケアや死への準備教育に関しては、これまで複数の事例報告が実践現場からなされてきてはいるものの、他の3つの領域と比較して十分な研究蓄積がなされてきているとは言い難く、さらに、日本において死の問題に対する心理学者からのアプローチは欧米と比較して乏しいのが現状である」と報告している。日本における「死」についての研究の乏しさは、日本人の文化的な背景にある「死」は忌むべきものであるといったネガティブな考え方が根深く、研究方法も制限されるためであると考えられる。

川島(2009)の分類によれば、本研究は、死への態度の研究であり、死の態度についての研究の多くは、死に対する恐怖や不安などの心理や死生観を尺度を用いて調査されている。

青年期を対象に、死生観尺度(丹下, 1995)や死に対する態度尺度(丹下, 1999)を用いた調査を行い、丹下(2002)は、「研究者が想定した範囲内でしか回答が得られず、その結果として、個々の研究から得られた知見は増えつつあるものの、「死生観」の全体的な構造については十分に検討されてきたとは言い難い」とし、死生観を尺度で捉えることの限界を指摘している。そして、「死」からの連想語を用いた研究を行い、「死をイメージする場合には、客観的な事象としてではなく、様々な意味、価値、態度、信念などを付与した形で想起がなされるであろう」とされ、客観的な事象である死の諸属性だけでは、人々のもつ死のイメージを捉えきれていないことが報告されている。

しかし、子どもを対象に「死」について研究されているものの多くは、認知的発達に関連する子どもの死生観の形成に着目し、客観的な事象である死の属性が調査されているものが多い(赤澤, 2001; 仲村,

1994; 杉本, 2001; 辻本, 2010; 山岸・森川, 1995)。これらの研究は、子どもが対象であり質問紙による調査が行えないため、個別面接によって行われ、ピアジェの認知発達段階に基づいて検討が行われている。死の属性について、仲村(1994)は、特に中心となるものとして「生きているものはいつか必ず死ぬ」といった普遍性、「死んだ〇〇は～することができない」といった体の機能の停止、「生きているものは全て、いつかは必ず死ぬ」といった非可逆性が扱われているとしている。普遍性については、概ね6-8歳で理解できる(仲村, 1994; 山岸・森川, 1995; 杉本, 2001)といった知見は一致しており、体の機能の停止についても概ね6-8歳で理解するとされているが、山岸・森川(1995)は、「目に見える機能(呼吸・成長)については6-7歳で9割以上の子どもが理解しているが、目に見えない機能(痛覚・感情)についての理解は同年齢で4割程度である」と報告している。また、杉本(2001)は、9歳以上になると「目に見えなくてもできる」「いつもそばにいてくれる」といった回答が得られていることより、「霊的・精神的回答である」とし、さらに、辻本(2010)は、体の機能の停止を不動性として扱い、「幼児期(3-6歳)での目立った発達差は示されなかった」と報告している。このように、体の機能停止については、質問内容の違いや、アニミズムが影響し、一貫した知見を得られていないのではないかと考えられる。非可逆性についての理解は、仲村(1994)によると、「6-7歳では生き返れないという回答が9割以上である」とし、山岸・森川(1995)は、「5-6歳での理解は9割であるが、その後低下している」と報告している。また、仲村(1994)の研究では、死の概念が理解できているはずである9-11歳の子どもが、生まれ変わるという意味での「生き返れる」の回答がさらに増すとし、「死後の世界への思索、興味につながって行くと思われる」と考察されている。これらを踏まえ、非可逆性は概ね5-7歳で理解できると考える。しかし、前述したように、このような死の属性だけでは、多くの人をもつ死の概念を捉えていないのではないかと考えられ、そのため、死後観や死のイメージについての研究も行われてきた。

死後観については、成長するにつれ、骨になる、墓に入る、土にかえるなどの「現実的な回答」から天国、地獄、成仏する、生まれ変わるなどの「想像的な回答」が増加するとされている(杉本, 2001)。死のイメージについては、どの年代も嫌、こわい、悲しい、避けたいといった「否定的」な回答が主であるが、成長する

につれ、一区切り、運命であるといった「否定でも肯定でもない回答」が増加してくる傾向があるといえる(仲村, 1994; 杉本, 2001; 山岸・森川, 1995)。このように、子どもの死生観は成長するにつれ獲得されていくものであり、そこには認知的な発達が影響していることが考えられる。山岸・森川(1995)は、死の理解について、「全体として具体的・直感的な捉え方から、より一般的で客観的な捉え方になる」という認知発達に沿った発達傾向がみられていると報告している。

これらを踏まえて考えると、(1)死の「客観的な性質」である「死の属性」を調査するだけでは、子どもの持つ、死に対する考えを代表することは難しいこと、(2)死についてイメージを問う研究は個別面接や質問紙による調査で言語を用いて行われており、言語的な発達が未熟な幼児期の子どもたちから言葉でそのイメージを聞き出すことが難しいこと、(3)死の概念が死の属性や、恐怖・不安といった感情に対する調査が中心となり、多角的に捉えた研究が少ないことが、近年の研究からの課題となっている。

そこで、本研究では子どもに言語以外の方法で「死」のイメージを調査するため、イメージ描画法(やまだ, 2010)を用いることとする。それにより、(1)言語コミュニケーションが難しい対象者にも用いることができること、(2)「死」というとらえにくい対象に対して、直感的ないきいきとした表現をしてもらえること、(3)調査方法による制限にとらわれない、回答者の自由な表現が可能であること、(4)日本人にとって得意な表現方法であることが利点であると考えられる。

描画を用いて「死」のイメージを調査した研究として、Wenestam & Wass (1978)がある。彼らは、アメリカとスウェーデンの4歳から15歳を対象に描画によって「死」のイメージをとらえた研究をおこなっている。この研究では、描かれた描画を質的に検討し10のカテゴリーに分類し、その後、年齢と文化間で、カテゴリーの種類や出現頻度に差があるかを検討している。その結果、文化間で絵の質については類似性が認められたが、頻度や強調の差があるということが報告されている。さらに、年齢においては、各カテゴリーの絵を描いた子どもの平均年齢に有意差があること、死の概念の発達の先行研究を指示することを報告している。しかし、Wenestam & Wass (1978)の研究では、描画の分類において、キリスト教的な概念も含まれており、そのまま日本人の子どもたちの死生観に当てはめていいものであるかは検討の余地があると考えられる。

日本の子どもを対象に描画による調査を行っている

研究として、杉本（1996）がある。この研究では、言語を用いて調査を行った後に描かせた“死後の状態”についての43名の子どもの絵を検討している。その結果、天使・イエス様・死体・神様といった神・人間などや、雲・棺・花・家・ごちそう・遊び場・動物・教会といった物体などが描かれ、“一般的に教会学校に行っていて天国を描いた子どもたちの絵は明るくのびのびと想像力に満ちており、天国での生活への期待を感じさせた”と報告されている。この研究では、死後の状態について絵の描画を依頼しているが、同じように描画を用いて子どもの持つ死についてのイメージを問うことができるのではないかと考える。

3. 描画の発達

脳神経系や調整運動の発達により、幼児の表現力は飛躍的に向上するとされ、1歳半から2歳半にかけての短い線や点がたたきつけられるように描かれるなぐり描き期、2歳半から5歳にかけては、手首の調整が

可能となり、円、四角形、三角形、十字架などが描けるようになる象徴期、5歳から8歳にかけての、人・花・家などが図式的に描けるようになる図式期、8歳以降にかけての視覚的に写実的な表現（視覚的リアリズム）へと移行する写実期と、年齢によって描画に特有の特徴があり、各期に分類されている。

4. イメージの発達と認知的発達

イメージとは、心の中に思い浮かべる像、全体的な印象（新村，1998）とされている。そして、私たちが一般的に「○○についてイメージしてください」と言われた時のイメージは、その事象についての全体的な印象のことを指し、そのため、イメージにはその事象に対する個人の認識や思考も影響していると考えられるため、認知的な発達にともなって、イメージの質に広がりが見られるようになると思われる。

イメージの発達、描画の発達の特徴について表1にまとめる。

表1 認知的発達、イメージの発達、描画の発達の対応

年齢	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15～成人
ピアジェの認知発達段階	感覚-運動期		前操作期				具体的操作期				形式的操作期					
	言語に思考に先立ち、対象の認知を感覚と運動の活動によって行う。2歳ごろになると、対象の永続性が完成するなど表象的思考が始まる。原因と結果、目的と手段の関連といったものをもとに概念（スキーマ）を形成し、意図的に対象に働きかけるようになる。		目の前にある対象がなくてもその対象についてイメージし考えることができるようになる。また、言語によってある対象の概念を獲得することや、普段の親の行動をもとにしてまごとするなどの活動がみられるようになる。思考については、物事の表面的な部分にのみ焦点があてられ、対象の複数の側面に同時に注目することができない。思考が知覚に支配される。また思考の自己中心性（アニミズム、人工論、實在論）も特徴の1つである。				操作（内面化された活動）の獲得により、見かけに左右されない論理的思考が発達していく。具体的な現実思考が結びついていく。具体的な現実思考が結びついていくが、対象の見え方や、知覚のされ方によって思考が歪められてしまうことはなくなる（保存の概念の確立）。脱中心化により、物事を一つの側面からしか思考できなかったが、多くの側面より注目し、そこから得られた情報からより適切な推論が可能となる。脱中心化により客観的視点をもつ。				具体物や実際の場面を離れ、論理やイメージのみで複雑な推論ができるようになり、抽象的な思考が可能になる。「もし○○であれば」といった仮説演繹的思考も行えるようになる。最終段階をイメージして、操作を繰り返しながらものを作り上げたり、段階的な行動をとることもできるようになる。					
イメージの発達	事物について心の中で考えること（表象）が可能になるが、具体的な対象が、イメージしているその時に目の前に存在する必要があると考える。		表象機能の獲得により、延滞模倣、象徴あそび、描画などが可能となる。今日の前にない対象であっても、イメージが可能となるが、イメージする対象は具体的なものであり、また自己中心性により、主観的なイメージとなると考える。（具体物を具体物に置き換える、積み木をパスに見立てる）				イメージの内容が主観的なものから客観的なものへと変化する。具体的な現実思考が結びついていくことより、イメージも具体的なものとなることが考えられる。				抽象的な思考が可能になり、ある事柄を1つの可能性であるとかんがえることができるようになることから、より一般化したイメージを持つことができると考える。（平和と聞いて白いハトをイメージできるなど）					
描画の発達	なぐり描き期		象徴期				図式期				写実期					
	短い線や点がたたきつけられるように描かれる。		円や渦巻きなどを描き、何かの再現として意味づける。これは、主体のイメージの発達と関係し、描かれたものよりは思い描いたイメージを押しつけて成立する。円や四角形などを使って人（頭足人）を描く。				人や家、花など図式的な表現が出現する。見たものを写実的に描くのではなく、見えていなくても知っていることを描く（知的リアリズム）傾向がある。				均整のとれた表現、ある特定の視点からの表現が可能となる。視覚的リアリズムが増加する。					

5. 本研究の目的

本研究では、イメージ描画法を用いることで(1) 研究法よる制限にとらわれずに死のイメージを調査することを目的とする。また、日本の子どもに対し、死のイメージを描画で調査した研究がないため、(2) Wenestam & Wass (1978) の研究を基に文化によって抽出されるカテゴリーに違いがあるのか、(3) 各発達段階で抽出されるカテゴリーに違いがあるのかを検討していく。その際、認知的な発達に伴いイメージも質的に変化していくことが考えられるため、本研究では、ピアジェの認知的発達理論に基づき、3 - 11歳の幼児および児童を対象とし、前操作期にあたる3 - 5歳、具体的操作期への移行段階である6 - 8歳、形式的操作期への移行段階である9 - 11歳の3群に分けて検討していくこととする。

方 法

調査協力者 3 - 11歳の幼児・児童を対象として、①研究者の知人に個人的に依頼し、研究者が調査を実施、②本大学教員の知人に依頼し、幼児・児童の保護者が調査を実施するという2つの方法で、24名の幼児・児童に調査を実施した。対象となる子どもは、3歳5ヶ月から11歳9か月、平均年齢は84.71ヶ月(7歳0ヶ月)で、 $SD = 29.60$ 月(2歳5ヶ月)であった。

調査期間 2013年8月から10月

手続き1 ①研究者の知人(子どもの保護者)に個人的に依頼した場合は、研究者が個別に調査に関する説明文を保護者に渡し、調査についての説明を行い、同意が得られた後に調査を実施した。②本学教員の知人(子どもの保護者)に依頼した場合は、教員より、協力を求め、あらかじめ説明文、実施方法、調査にあたっての必要な物品を郵送し、説明文を読み同意を得られた場合、保護者が調査を実施し返送するよう依頼した。なお、倫理的な配慮として、①②の場合ともに、描画終了後、保護者と共に子どもにはぬり絵を実施するよう依頼した。これは、死に関する描画を行うことで生じたかもしれないネガティブな反応を緩和することを目的とした。また万一、研究協力後にネガティブな影響の報告があった際には研究者本人、また臨床心理士である指導教員が対応する旨を伝えた。

手続き2 上記の手続きで保護者に同意が得られた場合のみ、以下の手続きで調査を行った。子どもにA4画用紙と12色のクレヨンを渡し、下記の指示を行い描画を求めた。

指示：「死または死ぬことについて思うことを絵に

描いてください。」(年齢に応じて、「死ぬってどんなことだと思う?それを絵に描いてください。」に変更した。研究者が実施した調査では11歳の子どもには指示を変更せず行った。)「○○ちゃん(子どもの名前)がどう思うか知りたいので、好きなように思ったまま描いてね。途中でしんどくなったり、描きたくなくなったらやめてもいいからね。」

子どもの描画中に、保護者には年齢や死別体験などを記入する質問紙に回答を求めた(質問用紙は巻末に資料として添付した)。描画終了後、子どもに①何を描いたのか、②この絵を描いてどう感じたかを尋ね、調査が終了したことを伝えた。その後、数種類用意したものから好きなぬり絵を選んでもらい保護者と一緒に行った。保護者が調査を行う場合もこれに沿って行ってもらうように依頼した。

結果と考察

1. 描画の分類と各カテゴリーの特徴

3歳5ヶ月から11歳9ヶ月の子ども24名のうち、「死」についての描画が行えなかった2名と、「死」について描きたくなかった1名を除く21名(そのうち4名は2枚描画)の25枚の描画を分析対象とした。

描画の分類に際しては、先に紹介したWenestam & Wass (1978)の研究を参考にした。彼らは、A:反復的、B:文化的・宗教的な慣習、シンボル、C:原因、D:死後の世界のキリスト教的な概念、E:情緒、F:死の性質に分け、さらにカテゴリーBを死者が描かれるもの(B1)と描かれないもの(B2)に分けた。同様に、Cも、火事、自動車事故、へびによる咬傷によって人が殺されるもの(C1)と、銃撃、死傷事件、戦争といった暴力行為によるもの(C2)に分け、カテゴリーFを神などの具体的表現や擬人化であるF1、絵の意味を説明する言語的なコメントつきで死の抽象的な象徴を描写したF2、死が新たな人生の出発点であり、故人や時には遺族の新たな始まりへの意向であるという概念であるF3に分け、計10個のカテゴリーが報告されている。本研究では、心理学教員と本研究筆者で、このカテゴリーを参考に、全ての描画をレビューして類似しているもの同士を集め、まとめた。さらに、まとめたカテゴリーの中から共通性を見つけ、カテゴリーのラベリングを行い、本研究では『可視の死』(8枚)、『文化・宗教的な習慣・シンボル』(3枚)、『死の原因』(8枚)、『死後の世界』(2枚)、『情緒』(1枚)、『分類不可』(3枚)の6つのカテゴリーが抽出された。その際、心理学教員と本研究筆者の間

で不一致は認められなかった。さらに、抽出されたカテゴリーに従い、心理学専攻大学院生2名が再度描画を分類した。その結果、各カテゴリーに分類された描画は、心理学教員と本研究筆者が分類したものとすべて一致した。Wenestam & Wass (1978) の研究で報告されたカテゴリーと本研究でのカテゴリーを表2に示す。

各カテゴリーの内容は以下の通りである。

『可視の死』目に見ることができ死、体験を通しての死とし、見たことのある死体や死骸をそのまま描画したと思われる描画を分類した。その結果、本研究では、5名の子ども(うち、3名が2枚描画)の8枚の絵がこのカテゴリーに分類された。カテゴリー内の平均年齢4歳8ヶ月(56ヶ月, $SD = 12.40$ ヶ月), 男児3名, 女児2名であった。以下に『可視の死』のカテゴリーに分類された描画を示す。



図2 3歳5ヶ月 女 左側は白雪姫の口からお腹に毒リングが入った様子, 右側は白雪姫が死んだところ。描画1ヶ月前に曾祖母が亡くなられ、母親がその際にずっと白雪姫のように眠ってしまって目を覚まさないと教えたとのこと。



図1 3歳6ヶ月 女 せみとせみの家

道にせみの死骸が落ちているのを見て「せみ死んでるわ」と話していたとのこと。

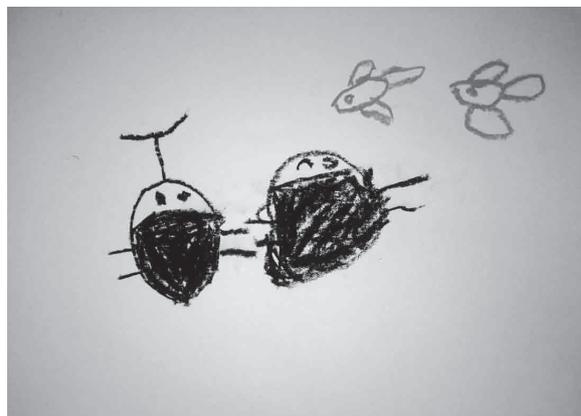


図3 5歳2ヶ月 女 カブトムシや魚の死骸

表2 描画のカテゴリー

Wenestam & Wass (1978)		本研究
	A: 反復的	可視の死
B: 文化的・宗教的な慣習, シンボル	B1: 死者が描かれる B2: 死者が描かれない	文化的・宗教的な慣習, シンボル
C: 原因	C1: 災害、事故による殺人 C2: 暴力行為による殺人	死の原因
D: 死後の世界のキリスト教的な概念		死後の世界
E: 情緒		情緒
F: 死の性質	F1: 神などの具体的表現や擬人化 F2: 死の抽象的な象徴 (言語的コメントつき) F3: 新たな始まりへの意向である概念	
		分類不可

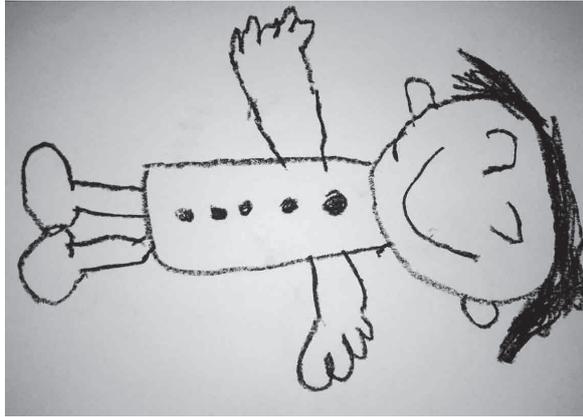


図4 5歳2ヶ月 女 おじいさんの遺体



図7 5歳8ヶ月 男 死んだおじいさんと死んだ犬

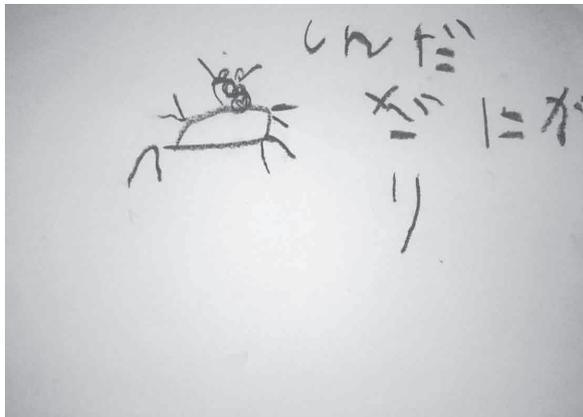


図5 5歳9ヵ月 男 ザリガニの死骸

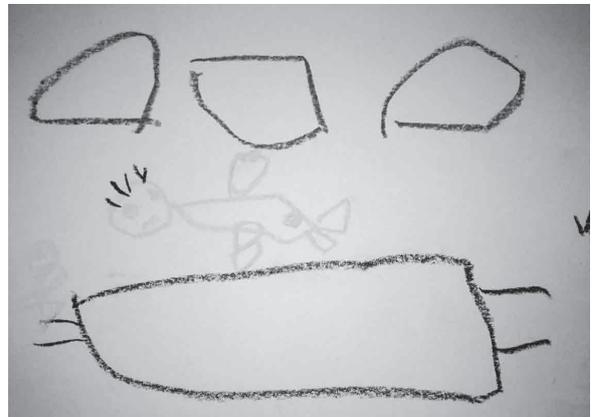


図8 5歳8ヶ月 男 人が死んで救急車で運ばれたところ

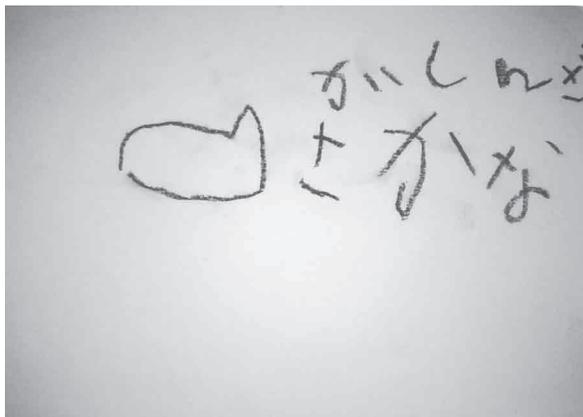


図6 5歳9ヵ月 男 魚の死骸

Wenestam & Wass (1978) では、“カテゴリー A：反復的”と命名し、反復的に「死」という言葉を繰り返しながら誰かの死を描写しているものとされ、具体的な遺体や死骸を描画しているという点で類似しており、概ね今回の研究結果と一致するものであるといえる。

Wenestam & Wass (1978) では、「死」「死んだ」といった言葉を反復的に用いて描画しているとのことで“反復する”といった名称であったが、本研究では言葉の反復は除外し、見たまま、体験したままである死として『可視の死』とした。また、Wenestam & Wass (1978) は、死の概念についての理解の不足は明白であるとされていたが、本研究でも、図8を描いた男児が「まだ意識がある」といった発言があり、死の概念の理解は十分ではないことが考えられた。

『文化的・宗教的慣習およびシンボル』 墓地、墓、棺、十字架などの死からイメージされる文化的・宗教的なシンボルとして分類した。その結果、本研究では3名

の子どもの描画がこのカテゴリーに分類された。カテゴリー内の平均年齢は9歳9ヶ月(117ヶ月, $SD = 10.14$ ヶ月), 男児2名, 女児1名であった。以下に『文化的・宗教的慣習およびシンボル』のカテゴリーに分類された描画を示す。

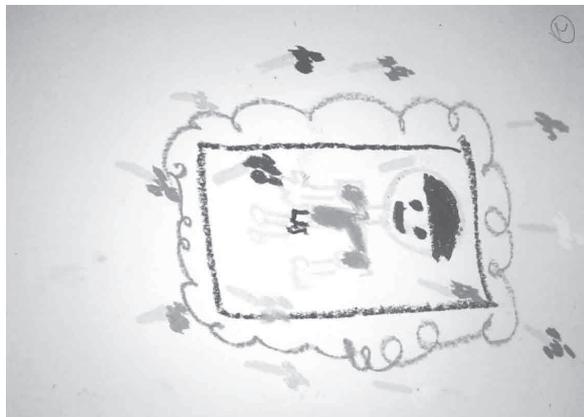


図9 9歳2ヶ月 男 棺の周りに花が咲き、まわりにピンク色の飾り



図10 9歳3ヶ月 男 お墓

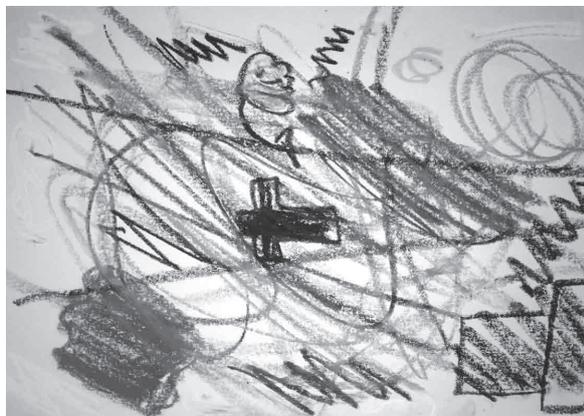


図11 11歳0ヶ月 女 十字架, お墓, 雷, しおれた花と赤・緑・青・黄・黒でなぐり描き

Wenestam & Wass (1978)の研究では、文化間での差が見られ、性別に関わらずスウェーデンの子どもの方がアメリカの子どもよりも“カテゴリーB：文化的・宗教的な慣習, シンボル”に該当する描画を行ったとされている。また、死者が描かれているか否かでさらに下位カテゴリーに分類し、死者が描かれていないとされるB2カテゴリーの方が、有意に多い結果となり、またスウェーデンの子どもはB1カテゴリーよりもB2カテゴリーの方が有意に多いと報告されているが、なぜ死者の描写がない方が多いかについての考察はなされていない。本研究では、サンプル数が少ないこともあり、死者の描写がなされているか否かに問わず、『文化的・宗教的慣習およびシンボル』として分類することとした。

『死の原因』人が死ぬ際の原因を描写したものである。Wenestam & Wass (1978)は、C1カテゴリーとして、火、自動車事故、毒蛇にかまれた傷、アルコール消費などによって人(複数可)が殺される出来事を描くものと、C2カテゴリーとして、射撃、突き刺すこと、および戦争のような暴力行為によって引き起こされた死を描いたものに分類している。本研究では、サンプル数が少ないことにより、C1とC2に分けず、死の原因が描かれたものとして分類した。その結果、7名の子ども(うち、1名は2枚描画)の8枚の絵がこのカテゴリーに分類された。カテゴリー内の平均年齢が7歳6ヶ月(90ヶ月, $SD = 29.28$ ヶ月), 男児5名, 女児2名であった。以下に『死の原因』のカテゴリーに分類された描画を示す。

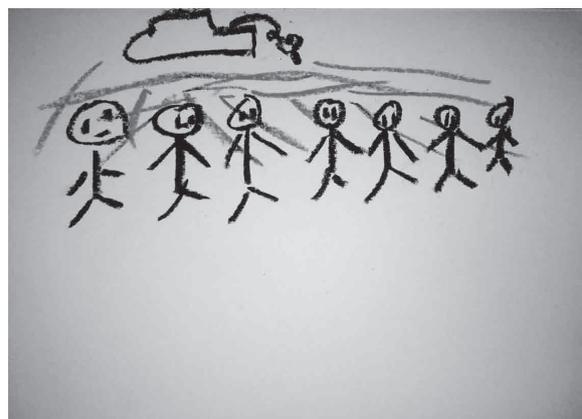


図12 9歳4ヶ月 男 原爆が落とされたところ

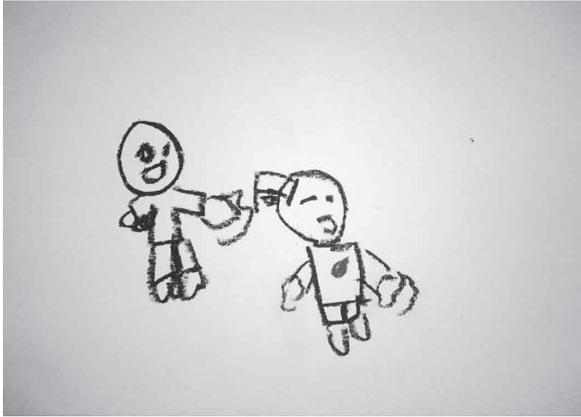


図13 9歳4ヶ月 男 人が刺されたところ



図16 6歳11ヶ月 男 ナイフで刺されている人、車とおまわりさんと僕



図14 9歳3ヶ月 男 人が撃たれたところ



図17 6歳2ヶ月 男 ナイフで刺されたところ

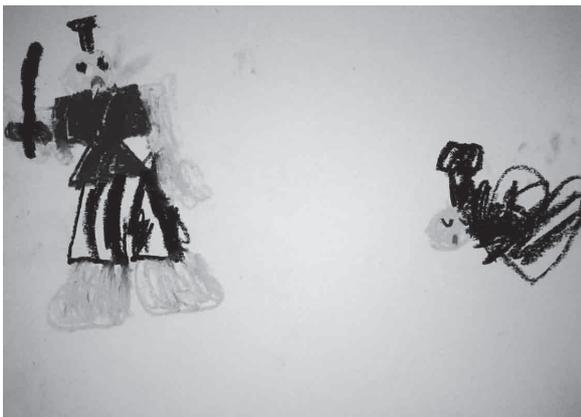


図15 6歳5ヶ月 女 お侍さんが刀ふって、死んだ人



図18 11歳4ヶ月 男 首を吊って刺されているところ



図19 6歳2ヶ月 女 鉄砲撃った人と死んだ人

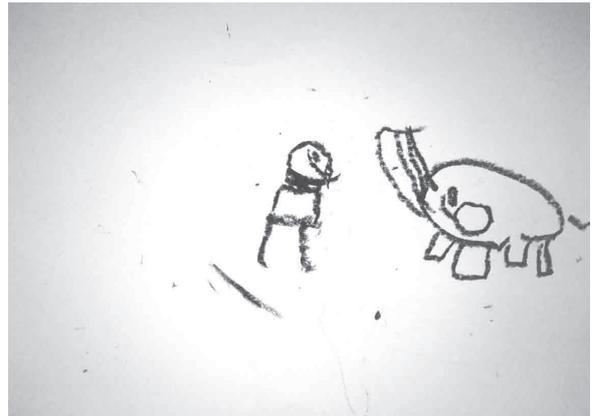


図20 5歳9ヶ月 男 人とゾウ
描画後に、「死んだら動物になる」と話している

このカテゴリーの共通点は、死に至る原因が描かれていることである。『死の原因』には、外的なものとの内的なものがあるが、描画として表出されたものは、外的なものであった。その理由として、内的なものは描画として表現しづらいこと、また抽象的なものであることが考えられる。Wenestam & Wass (1978) の研究では、外的要因による死を“事故によって引き起こされた死”と“暴力行為による死”とを分けて分類し、アメリカの男児がより暴力行為による死を描画しているというこの結果を、テレビによる暴力の露出が原因であると考察している。本研究では『死の原因』に分類された描画はすべて暴力行為による死を表現しているものであった。日本においても、ニュースやドラマなどメディアを通して、人を刺したり、拳銃で撃ったりする場面がみられることが多く、この年代の子どもたちがテレビを通して印象づけられている可能性があると考えられる。

『死後の世界』 死んだあとの状態を描写したものである。天国、地獄や生まれ変わり思想などを描いたものを分類した。Wenestam & Wass (1978) は調査をアメリカとスウェーデンというキリスト教が普及している国で調査を行っているため描画の内容もキリスト教に基づくものが多く、カテゴリー名を“あの世のキリスト教的概念”としているが、本研究は日本の子どもを対象としているため、キリスト教に限定せず、死後の世界観を描いているものとした。その結果、5歳9ヶ月、11歳9ヶ月の男児2名の描画をこのカテゴリーに分類した。以下に『死後の世界』に分類された描画を示す。



図21 11歳9ヶ月 男 人が天国に行く時の情景
両手を伸ばし死後の世界への旅立ちの場面

仏教の輪廻転生の思考や、一般的な通念である“死んだら天国に行く”といった思考が子どもをとりまく環境の中にあり、体験として影響しているのではないかと考える。今回の調査では、信仰している宗教などは確認できていないため、子どもをとりまく環境については今後の課題であると考えられる。

『情緒』 悲嘆、心配および恐怖のような情緒的な表現の描画を分類した。その結果、8歳9ヶ月の女児1名の描画をこのカテゴリーに分類した。以下に『情緒』のカテゴリーに分類された描画を示す。



図22 8歳9ヶ月 女 男の子が泣いているところ

Wenestam & Wass (1978) の研究でも、この『情緒』カテゴリーが抽出されている。本研究でも、「死」は悲しいものであるという感情は一般的なものであり、客観的な感情のイメージが描かれたと考える。

『分類不可』 描画は行えていたがどのカテゴリーに当てはまるかの判断ができなかったものを『分類不可』とし、3名の描画を分類した。平均年齢4歳4ヶ月(52ヶ月, $SD = 6.98$ ヶ月), 3名とも女兒であった。以下に『分類不可』に該当する描画を示す。



図23 5歳2ヶ月 女 お泊まり保育の絵



図24 3歳7ヶ月 女 ピンク・黄緑・緑のクレヨンでなぐり描きされたものの上に黒のクレヨンでさらに書き加えている。右横にナイフに見えるものがあるが、本人は「わかんない」といっているため不明。

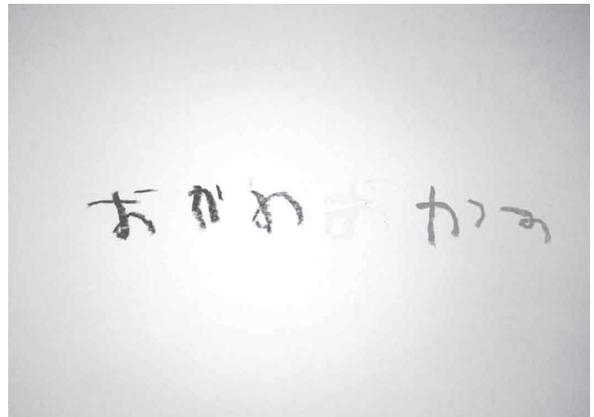


図25 4歳5ヶ月 女 文字

「死んじゃう」と書いたとのこと

描きたくなかったため死とは異なるテーマで描画を行った8歳9ヶ月女兒1名を“描かなかった”とし、図26に示す。“描けなかった”2名は描画自体を行わなかった。平均年齢は6歳5ヶ月(77ヶ月, $SD = 17.50$ ヶ月), 3名とも女兒であった。



図 26 8歳9ヵ月 女 バスケットボールをしているところ

Wenestam & Wass (1978) は、“死の性質”といったカテゴリーに分類しているが、本研究ではこのカテゴリーに該当する描画はみられなかった。その理由として、Wenestam & Wass (1978) の研究では、このカテゴリーには死神などが描かれ文化的な背景の影響があること、またこのカテゴリーに該当する描画を行っていた子どもの年齢が本研究よりも上であることが考えられる。

2. 各カテゴリーの年齢による検討

さらに、発達段階での比較を行うために、3つの年齢群に分けて分析を行った。第1年齢群(3-5歳)は男児3名、女児7名の計10名であり、平均年齢は4歳8ヶ月(56.7ヶ月)、SD = 10.70ヶ月であった。同様に、第2年齢群(6-8歳)は男児2名、女児5

名の計7名であり、平均年齢は8歳0ヶ月(96.1ヶ月)、SD = 15.26ヶ月、第3年齢群(9-11歳)は男児6名、女児1名の計7名であり、平均年齢は11歳4ヶ月(136.3ヶ月)、SD = 3.68ヶ月であった。

各カテゴリーに、“描かなかった”と“描けなかった”の項目を加え、年齢群と性別の度数分布を示したものが表3である。

年齢群とカテゴリーの度数についてχ²検定を行った。その結果、χ²(12) = 34.07, p<.01で有意であった。年齢群におけるカテゴリーの度数分布と調整済み残差を表4に示した。

残差分析の結果、第1年齢群は、『可視の死』と『分類不可』が多く、第3年齢群では、『文化的・宗教的慣習およびシンボル』が多かった。また、第1年齢群の『死の原因』と第3年齢群の『可視の死』は少なかった。

さらに、『分類不可』と『描けない』を除き、χ²検定を行った結果も同様に有意であり(χ²(8) = 27.10, p<.01)、残差分析の結果、『分類不可』と『描けない』を加えて分析を行った結果統計的に有意であったものに加え、第2年齢群の『死の原因』が多かった。

性別によって各カテゴリーに差があるかを確認する為にχ²検定を行ったが、有意な結果は得られなかった(χ²(6) = 11.33, n.s.)。死別体験の有無、入院・病気の経験の有無も同様に各カテゴリーの度数分布に差があるかを確認する為にχ²検定を行ったが、それぞれ有意な結果は得られなかった(χ²(6) = 3.37, n.s.)、(χ²(6) = 10.67, n.s.)。

表 3 年齢群・性別におけるカテゴリーの集計

年齢/性別	描画の分類																
	可視の死			文化・宗教的慣習、シンボル			死の原因			死後の世界			情緒		描けなかった	描かなかった	分類不可
	合計	男	女	合計	男	女	合計	男	女	合計	男	女	合計	男			
第1年齢群(3~5歳)	8	4	4	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	1	0	3
第2年齢群(6~8歳)	0	0	0	0	0	0	4	2	2	0	0	0	1	0	1	1	0
第3年齢群(9~11歳)	0	0	0	3	2	1	4	4	0	1	1	0	0	0	0	0	0
合計	8	4	4	3	2	1	8	6	2	2	2	0	1	0	1	2	3

表 4 各カテゴリーの度数分布と各年齢群でのクロス表

年齢群/カテゴリー	可視の死	文化・宗教的慣習、シンボル	死の原因	死後の世界	情緒	分類不可	描けない
第1年齢群(3~5歳)	8	0	0	1	0	3	1
(調整済み残差)	3.59**	-1.71	-3.12**	.11	-0.95	1.97*	-0.48
第2年齢群(6~8歳)	0	0	4	0	1	0	2
(調整済み残差)	-1.93	-1.06	1.93	-0.85	1.76	-1.06	1.76
第3年齢群(9~11歳)	0	3	4	1	0	0	0
(調整済み残差)	-2.12*	2.90**	1.59	.07	-0.64	-1.16	-1.16

*p<.05, **p<.01

『可視の死』は、見たことのある死体や死骸をそのまま描写したと思われる描画を分類した。このカテゴリーに分類された8枚の描画はすべて第1年齢群(3-5歳)の子どもが描いたものであり、 χ^2 検定において有意であった。そのため、第1年齢群(3-5歳)の子どもはこのカテゴリーに該当する描画を描くことができる。また、このカテゴリーに該当する描画を描いた子どもの平均年齢は4歳8ヵ月($SD = 12.40$ ヵ月)であった。Wenestam & Wass (1978)でも、“カテゴリーA:反復的”に該当する描画を描いた子どもの平均年齢は5.83歳($SD = 1.25$ 歳)であり、一致する結果となっていると考える。

また、『可視の死』には第2年齢群、第3年齢群の子どもたちの描画は見られず、第3年齢群の子どもたちの描画がみられなかったことのみ統計的に有意であった。成長するにつれ、目に見えるものだけでなく、「死」からイメージを膨らませていくことが可能となっているため、目に見える死を描くことはなかったのではないかと考える。

『文化的・宗教的慣習およびシンボル』は、墓地、墓、棺、十字架などの死からイメージされる文化的・宗教的なシンボルの描画を分類した。このカテゴリーに分類された3枚の描画は第3年齢群(9-11歳)の子どもが描いたものであり、 χ^2 検定において有意であった。また他の年齢群の子どもが描いた描画はこのカテゴリーに該当するものはなかった。そのため、第3年齢群の子どもはこのカテゴリーに該当する描画を描くことができる。また、このカテゴリーに該当する描画を描いた子どもの平均年齢は9歳9ヵ月($SD = 10.14$ ヵ月)であった。Wenestam & Wass (1978)の研究では、シンボルとともに遺体を描いているもの(B1)と遺体を描かないもの(B2)とに分けて分類しており、B2の平均年齢は12.13歳($SD = 3.67$ 歳)、B1の平均年齢は9.40歳($SD = 3.71$ 歳)であり、遺体を描いていない描画を行った子どもの方が年長であると報告されている。本研究では、図9は遺体を描いているが、図10、11は遺体がかかれていない。サンプル数が少ないため、言及できないが、概ね一致する結果となっていると考える。

『死の原因』は、人が死ぬ際の原因を描写したものを分類した。このカテゴリーに分類された8枚の絵は、第2年齢群(6-8歳)と第3年齢群(9-11歳)の子どもが描いたものであり、第1年齢群(3-5歳)

の子どもが描いた描画はこのカテゴリーに該当するものではなく、第1年齢群の描画がないことのみ統計的に有意であった。また、『分類不可』と『描けない』を除き検定を行ったところ、第2年齢群(6-8歳)の子どもが描いた描画が統計的に有意に多かったことから、この年齢の子どもは『死の原因』について描くといえるのではないかと考える。このカテゴリーに該当する描画を描いた子どもの平均年齢は7歳9ヵ月($SD = 29.28$ ヵ月)であった。

『死後の世界』は、死んだあとの状態を描写したものである。天国、地獄や生まれ変わり思想などを描いたものを分類した。このカテゴリーに分類された2枚の絵は、第1年齢群(3-5歳)と第3年齢群(9-11歳)の子どもが描いたものであったが、統計的に有意ではなかった。また、このカテゴリーに該当する描画を描いた子どもの平均年齢は8歳9ヵ月($SD = 36.00$ ヵ月)であった。

Wenestam & Wass (1978)の研究では、この死後の世界観についてはキリスト教的な概念がより反映したものとされており、平均11.90歳($SD = 3.75$ 歳)の子どもがこのカテゴリーに該当する描画を行っている。本研究では11歳9ヶ月の子どもと5歳9ヶ月の子どもが、このカテゴリーに該当する描画を行っているが、サンプル数が少ないためさらに調査が必要であると考えられる。

『情緒』は、悲嘆、心配および恐怖のような情緒的な表現の描画を分類したものである。このカテゴリーに分類された1枚の描画は、第2年齢群(6-8歳)の8歳9ヶ月の女児1名の描いた描画であり、統計的には有意ではなかった。Wenestam & Wass (1978)の研究では、平均11.83歳($SD = 3.30$ 歳)の子どもがこのカテゴリーに該当する描画を行っているため、本研究では1例ではあるが、一致するものであると考える。

『分類不可』は、描画した子どもに描画後に聴取しても何を描いたかの回答が明確ではないもの、また「死」を描いたと回答するが、どのカテゴリーにも分類できないものを分類不可とし、第1年齢群(3-5歳)の子どもが描いた3枚の描画が該当し、 χ^2 検定で有意であった。

この描画を描いた子どもの平均年齢は4歳4ヶ月(52.0ヶ月、 $SD = 6.98$ 歳)であり、各カテゴリーの平均年齢が1番低いことから(統計的には有意ではないが)「死」ということの意味が不十分であり、何を描画しているのか分からなかった可能性があると考えられる。また、『描けなかった』という反応があり、こちらは

「死」についてイメージできなかつた、イメージはできているが、描画として表すことができなかつた、また「死」そのものが理解できていなかつた可能性があると考ええる。さらに図 26 は『描きたくなかつた』といった反応であつた。「死」は悲しいものであるといったネガティブなイメージがあり、楽しい場面の描画に至つたのではないかと考える。

カテゴリーへの分類後、“描かなかつた”と“描けなかつた”の項目を加え、各カテゴリーの平均年齢とSDを算出した。その結果を表5に示す。

表5 各カテゴリーの平均年齢(月齢)とSD

	年齢(月齢)	SD
可視の死	4歳8ヶ月 (56.4)	12.40
死の原因	7歳9ヶ月 (90.1)	29.28
死後の世界	8歳9ヶ月 (105.0)	36.00
情緒	8歳9ヶ月 (105.0)	—
文化・宗教的慣習, シンボル	9歳9ヶ月 (117.7)	10.14
分類不可	4歳4ヶ月 (52.0)	6.98
描けない	6歳5ヶ月 (77.5)	17.50
描かない	8歳9ヶ月 (105.0)	—

さらに、各カテゴリーの平均年齢を比較するために、度数が1しかなかつた『情緒』カテゴリーを除いて分散分析を行つた。結果、カテゴリーの主効果が有意であつた ($F(6,26) = 4.506, p < .05$)。多重比較の結果、『可視の死』と『文化・宗教的慣習, シンボル』、『文化・宗教的慣習, シンボル』と『分類不可』の間に有意差を認め、『文化・宗教的慣習, シンボル』のカテゴリーに該当する描画を描いた子どもの方が『可視の死』『分類不可』のカテゴリーに該当する描画を描いた子どもよりも平均年齢が高かつた。また、その他のカテゴリー間の平均年齢に有意差は認められなかつた。

これらの結果を踏まえ、Wenestam & Wass (1978) の先行研究では、各カテゴリーの平均年齢で有意な差を

認めており、本研究では『可視の死』と『文化・宗教的慣習, シンボル』、『文化・宗教的慣習, シンボル』と『分類不可』の間に平均年齢に有意な差がみられた。また、年齢群に分け分析を行つた結果、第1年齢群は、『可視の死』、『分類不可』、第3年齢群は、『文化的・宗教的慣習およびシンボル』が予想より多かつた。さらに、第1年齢群の『死の原因』と第3年齢群の『可視の死』は予想より少なかつた。よつて、カテゴリーによつて描く子どもの年齢に違いがあることが示唆された。

さらに、病気・怪我での入院体験、死別体験と各カテゴリーの関係については、入院体験、死別体験ともに各カテゴリー間で有意な結果は得られなかつた。しかし、個々の事例をみていくと、死別体験を通して、その子の発達段階に応じた反応が認められている。仲村(1994)は、“死別体験が子どもの死後観に大きな影響を与えることが考えられ、児童期の初期であつても、死別体験をすることで、死が単に焼かれて骨になりお墓に入るといった現実的な意味だけでなく、死後の世界や靈魂についても考えるような死についての理解の深まりや広がり形成されていくことが予想できる”と考察している。このことより、死別体験を通して、子どもの死に対する考え方は変化していくといえるのではないかと考える。本研究では、サンプル数の少なさが、統計的に有意な結果を得られなかつたことに影響している可能性も考えられるため今後の課題であると考ええる。

3. 描画に関する時間的指標

描画時に、①教示後から描画開始までの時間(以下、平均時間)、②教示後から描画終了までの所要時間(以下、所要時間)を測定し、平均値とSDを算出した。その結果、描画全体での①平均時間は32.6秒($SD = 4.66$ 秒)、②所要時間は286.2秒($SD = 1.96$ 秒)であつた。各カテゴリーでのそれぞれの時間的指標について示したものが表6である。

表6 描画に関する時間的指標(秒)

	『可視の死』	『文化・宗教的慣習, シンボル』	『死の原因』	『死後の世界』	『情緒』	『分類不可』
	範囲 0-330	16-210	10-131	5-195	—	2-15
①教示後から描画開始までの時間(秒)	中央値 30	30	48	100	120	28
	平均値(log値) 14.3(2.7)	46.5(3.8)	45.0(3.8)	31.2(3.4)	—	31.5(3.5)
	SD(log値) 10.04(2.30)	2.99(1.09)	2.27(0.82)	6.25(1.83)	—	3.22(1.17)
	範囲 180-600	220-354	131-900	30-300	—	252-406
②教示後からの所要時間(秒)	中央値 360	290	240	165	740	317
	平均値(log値) 325.0(5.8)	282.7(5.6)	272.5(5.6)	94.9(4.6)	—	318.9(5.8)
	SD(log値) 1.57(0.45)	1.21(0.20)	1.83(0.60)	3.16(1.15)	—	1.21(0.19)

①平均時間、②所要時間について各カテゴリーで比較した結果、いずれもカテゴリーの主効果は有意ではなかった($F(5,15) = .599, n.s.$; $F(5,17) = .842, n.s.$)。『可視の死』では、描画開始までの時間に幅があり、具体的な体験を通してみたまを描画しているためすぐに反応できる半面、本研究では1番幼い子どもたちが描画したカテゴリーであるため、教示された内容を理解し、体験したことと関連づけるまでに時間を要する子どもがいたことも考えられる。『情緒』や『死後の世界』のカテゴリーの描画開始までの平均時間が長い傾向があり、どちらのカテゴリーも他のカテゴリーに比べ抽象的であり、イメージするまでに時間が必要であったこと、また、これらのカテゴリーは、本研究の中では概ね年長の子どもが描いており、年齢があがるにつれ「死」に関連するネガティブな体験をしている可能性も高くなり、「死」という言葉に対する心理的な衝撃も強く、描画に至るまでや描画を完成させるまでに時間を要した可能性も考えられる。しかし、どのカテゴリーにおいても「死」の理解は個人の体験を通して進むものであり、すぐにイメージできるかは個人差があること、またイメージしたものを描画としてどう表現するのかを考えて描くため、年齢だけではなく個人の特性や描画への慣れといった要因が大きく影響していることが考えられる。

4. 描画中の反応について

描画中の反応について、「難しい」「わからない」といった反応がみられた。「わからない」と反応した子どもの平均年齢は5歳10か月(70.8ヶ月、 $SD = 22.24$ ヶ月)、「難しい」と反応した子どもの平均年齢は8歳1ヶ月(97.2ヶ月、 $SD = 34.97$ ヶ月)であった。独立2群のt検定を行った結果、有意な結果は得られず($t(18) = 0.70, n.s.$)、原因としてサンプル数の少なさが影響している可能性がある。「わからない」には死という意味がわからない、何を描いていいのかわからないという2つの可能性があると考えられる。また、「難しい」には、死について理解しているが死そのものが抽象的で描くのが難しいといった意味があるのではないかと考える。そのため、より年齢の幼い子ども間で「わからない」といった反応がでることは妥当ではないかと考える。さらに、「難しい」と反応した子どもの描画には、『情緒』や『文化・宗教的慣習』のカテゴリー該当する描画があり、年齢が高くなるにつれ、目にしたままの「死」からより豊かな表現へと変化するため抽象度が高くなり「難しい」と感

じることが多くなるのではないかと考える。しかし、半数以上の子どもは「わからない」や「難しい」といった感想なく描画が行えており、「死」という漠然としたものの表現として描画を用いることは子どもにとって身近な方法での表現であり私たちが考えるよりも心的な表象を表現しやすいのではないかと考える。

今後の課題

本研究において、サンプル数の少なさより、統計的には十分に参考になるような結果が得られていない。先行研究では、死別体験や入院経験が死生観の獲得に影響しているとの報告もあり、量的にも、典型例を抽出する質的な検討においてもサンプル数が多くなければ客観的な指標とはなりにくいと考える。

結 論

本研究では、子どもがどのように「死」を理解しているかを知るためにイメージ描画法を用いて調査を行った。そして、描かれた描画を類似するもので分類した。その結果、『可視の死』『文化・宗教的慣習、シンボル』『死の原因』『死後の世界』『情緒』『分類不可』の6つのカテゴリーが抽出され、『可視の死』と『文化・宗教的慣習、シンボル』、『文化・宗教的慣習、シンボル』と『分類不可』の間に平均年齢に有意な差がみられた。また、年齢群に分け分析を行った結果、第1年齢群は、『可視の死』、『分類不可』、第3年齢群は、『文化的・宗教的慣習およびシンボル』が予想より多かった。さらに、第1年齢群の『死の原因』と第3年齢群の『可視の死』は予想より少なかった。これらの結果は、Wenestam & Wass (1978)の研究と概ね一致するものであった。

子どもの死の捉え方は、発達に応じたものであるが、その子どもを取り巻く環境の影響も大きいと考える。子どもが死を学ぶ機会は、日常中の体験を通して身近な大人がどのように伝えていくかによっても大きく左右されるのではないかと考える。また、死別体験は、子どもにとって日常からかけ離れたとても印象に残る経験であるように思う。子どもから「死」を遠ざけるのではなく、身近な体験を通して大人が伝えていくことが大切なのではないか、そのためには、大人が自分なりに死や生について考えていることが必要なのではないかと考える。

引用文献

- 赤澤正人 (2001). 子どもの死の概念について 臨床死生学年報, 6, 130-137.
- アルフォンス・デーケン (2001). 生と死の教育 岩波書店
- 川島大輔 (2009). 死への意味づけの生涯発達心理学研究 - 老年期における死と宗教へのナラティブ・アプローチ - 京都大学博士論文 (未公開)
- 仲村照子 (1994). 子どもの死の概念 発達心理学研究, 5, 61-71.
- 新村 出 (編著) (1998). 広辞苑 第5版 岩波書店
- 杉本陽子 (2001). 子どもの「死別体験」「死後観」「死のイメージ」 - 慢性疾患患児と健康児への面接調査による比較検討 - 日本小児看護学会誌, 10, 22-33.
- 杉本玲子 (1996). 子どもの死生観と宗教性 青山学院女子短期大学総合文化, 研究所年報, 4, 23-39.
- 丹下智香子 (1995). 死生観の展開 名古屋大学教育学部紀要, 教育心理学科, 42, 149 - 156.
- 丹下智香子 (1999). 青年期における死に対する態度尺度の構成および妥当性・信頼性の検討 心理学研究, 70, 327-332.
- 丹下智香子 (2002). 「死」からの連想語のKJ法による分類 - 死生観の構造の検討 - 名古屋大学大学院教育発達学研究科紀要 心理発達学, 49, 157-168.
- 辻本耐 (2010). 幼児期における死の概念の発達的变化 大阪大学教育学年報, 15, 57-69.
- 上野轟 (1995). 17 死生観の発達と臨床 岡堂哲雄 へるす出版 pp.198-208.
- Wenestam, C.G., & Wass, H. (1978). Swedish and U.S. Children's thinking about death: A qualitative study and cross - cultural comparison. *Death Studies*, 11, 99 - 121.
- やまだようこ・加藤義信・戸田有一・伊藤哲司 [著] (2010). この世とあの世のイメージ 描画のフォーク心理学 新曜社
- 山岸明子・森川由美子 (1995). 子どもの死の概念の発達 - 認知発達による変化と大人の考え方への同化の観点から - 順天堂医療短期大学紀要, 6, 66 - 75.